

東京在住ニューカマーインド人のコミュニティ形成 ー「共棲」の視点から考える親密圏の活動ー

井上貴子

本稿は、東京在住のニューカマーインド人が、いかにして自らの「居場所」を確保し、コミュニティを形成してきたかを、「共棲」の視点から考察するものである。ジュディス・バトラーが論じているように、この視点は、他者と居住空間を共有するための望ましい方法に関する知見を提供する。IT 産業が高度に発展した南インド出身のニューカマーの人口は、東京では 21 世紀初頭から急増している。そこで、本稿では彼らの親密圏での活動に焦点をあて、主に家族形成、学校教育、文化活動を分析する。また、彼らのコミュニティ形成について検証し、日本における「共棲」のあるべき姿とそれを実現するための戦略を展望する。

ニューカマーインド人の多くは IT 技術者とその家族で、ソジョナー性を共有している。それは、祖国への空間的・文化的・感情的愛着の維持と、英語を話すグローバル市民としてコスモポリタンの自覚の発達という二つの異なる性質によって特徴づけられる。単身赴任の若い男性 IT 技術者は、日本での滞在が長期化すると、通常、インド人向け婚活サイトを通じて結婚相手を探し、インドに帰国して結婚し、新しい家族を帯同して再来日する。彼らは江戸川区西葛西周辺に「リトルインディア」と呼ばれるインド人街を形成してきた。典型的な南インド人の家族は UR 都市機構が運営する団地に居住し、子供をインド式教育と国際教育の両方の教育制度に対応するインターナショナルスクールで学ばせる。また、彼らは、言語州に基づいて組織された協会によって開催される文化イベントに参加することによって、自らの言語文化的アイデンティティを強化する。こうして、リトルインディアは、インドの生活習慣や文化伝統を維持する機能を有する、彼ら自身の居場所となった。

東京在住のニューカマーインド人にとって最大の課題は、いかにして日本社会の規範への適応力を高めるかということではなく、むしろ、故郷への愛着を維持しつつ、グローバルな市民としてトランスナショナルな移動に柔軟に対応できるような自らの居場所を形成することだといえる。彼らとの「共棲」を実現するために、まずは、「我々の居場所」だとみなされている空間に「他者の居場所」も存在することを承認し、他者がその空間に居住し続けるのを許容することが必要である。さらに、他者の声に耳を傾け、その声の意味を再考し、それを他者と共に政策に反映させるための戦略を立てていくべきである。